
けいおん IFストーリー

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん IFストーリー

【Nコード】

N9230N

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

けいおんのIFストーリーです。設定的には共学という設定です。時期的には梓が入る直前です。

プロローグ（前書き）

初めての小説なんでいろいろおかしいところがあるんで、心広く受け止めてください

プロローグ

プロローグ

それはある春のことだった。俺は一人、ある高校の合格発表を見に来ていた。周りは合格したことに喜んでいる人や落ち込んでいる人で溢れかえっていた。

雪那「えっと、俺は……あつた合格だ。」

合否を確認し、帰ろうしたとき誰かとぶつかり、ぶつかった人は地面におしりを打った。

梓「いったあ、」

雪那「あ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

梓「あ、大丈夫です。私も気がつかなくて……」

その少女は、黒髪のツインテールで、身長は少し小さいくらいの少女だった。制服からして合格発表を見に来たのだろう。

雪那「それじゃあ、また。」

梓「あ、はい、」

これが彼女との再会だった

プロローグ（後書き）

六甲水「初めての小説だああああ」

雪那「何つうか、思い切ったことするなあ。」

梓「所で、時間とか大丈夫なんですか？」

六甲水「大丈夫。今は秋休み。しばらくは大丈夫だ。うん」

雪那「心配だ」

六甲水「とりあえず、次回はキャラ設定だな。」

キャラクター設定（前書き）

六甲水「今回は雪那のキャラクター設定です」

キャラクター設定

けいおんEFストーリー

キャラクター設定

名前 霧生雪那きりゆつせつな1

詳細 梓の幼なじみ。

梓とは幼稚園からの中だが、中学は別々になったしまっであんまり会うことがなかった。

あまり人と関わるのが嫌いだったが、高校に入って変わろうとしている。

頭はかなり良く、授業の内容を決して忘れない。だが、人の名前は覚えられない。

運動は、出来るがあんまりしたく無い。

梓のことが好きだが、恥ずかしくて告白ができない。

あだ名は「ゆき」と呼ばれることがあるが、あまり気に入っていない。梓のことは「梓」と呼んでいる。

家は、四人家族で妹がいる。両親が音楽関係の店を開いているので雪那もそれなりに出来る。パートはギター。

妹の名前は小雪

キャラクター設定（後書き）

六甲水「以上で雪那のキャラ設定です」

雪那「所で、何で俺は合格発表時に梓のこと知らなかったんだ？」

梓「確かに」

六甲水「それは、次回やりますから」

第1話 再会の二人（前書き）

六甲水「第1話ですね」

雪那「そうだな。まだ第1話だな」

六甲水「てか、けいおんが終わったよ。」

雪那「いい話だったな。てか、どこまでやるんだこの話は？」

六甲水「まだ決めてないです。」

雪那「適当だな。」

第1話 再会の二人

第1話 再会する二人

入学式当日の朝、俺は登校しながらあることを考えていた。それは、合格発表の時に会った少女のことだ。

雪那「どこかで会ったことがあるんだよな。」

どこかで見たことがある顔立ち、それに髪型も見覚えがある。確かに覚えがあるが思い出せない。

雪那「もう一回、あの子に会えないかな？でも不合格だったらどうしよう」

そう考えながら歩いていると、後ろから誰かとぶつかった。振り向くとセミロングに茶色の髪の少女が鼻を押さえ、同じ茶色の髪に少し短いポニーテールの少女が心配した表情をしていた。

唯「ううゝ、おもいつきり鼻ぶつけた」

憂「お姉ちゃん大丈夫？」

雪那「あ、ご、ごめんなさい」

俺は謝ったが、セミロングの少女は笑顔で返してきた。見た感じ姉妹だ。セミロングの人は姉で、ポニーテールの人は妹か。

唯「あつ、大丈夫です。私も急いでたんで……」

雪那「いやでも、」

憂「あつ、あなたも桜ヶ丘なんですか？」

ポニーテールの少女が俺の制服を見て、嬉しそうに言った。

雪那「あ、はい。そうだけど、」

憂「私もなんです。お姉ちゃんと一緒の高校なんですよ。」

雪那「仲いいんですね。所で鼻大丈夫ですか？」

唯「はふ、な、何とか、所で君新入生？」

雪那「あ、はい、そうですけど、」

唯「じゃあ、是非、けい……」

憂「ああーお姉ちゃん。大変。」

姉のほうが何か言いかけた瞬間、妹のほう時計を見て驚いた。俺も自分の携帯の時計をみると、まだ時間に余裕があるが……どうしてだろう？

唯「はつ、朝練の時間。ご、ごめんね。私達急ぐから、それじゃあ」

そう言い残し、謎の姉妹は立ち去ろうとしたが……姉のほうに戻ってきた。

唯「あつ、私平沢唯です。よろしくね。でこっちが妹の憂だよ。同じクラスになつたらよろしくね」

雪那「あつ、俺は霧生雪那です。あの、時間大丈夫なんですか？」

唯「はっ、忘れてた。じゃあね」

唯と憂は走り去った。

雪那「何というか、慌ただしい人だな」

桜が丘高校の校門に着くと、そこに待っていたのは同じ中学の沢渡義亮だった。

義亮「よう、遅かったな」

雪那「ちつと、気になることと変わった姉妹に会ったからな。」

義亮「ふーん、変わった姉妹か。微妙に興味があるな。んで、気になることって？」

雪那「ちよつと、見たことのある奴と会った気がすんだよな。でも思い出せない」

義亮「まあ、ここで会ったんだ。きつとまた会えるだろう。」

雪那「そうかな？それよりクラスの方は？」

義亮はあくびをしながら答えた。

義亮「ん、同じクラスだぞ。先に見といた。けど、」

義亮は少し暗くなった。まあ理由は分かっている。

義亮「やっぱり、女子が多いな。俺とお前を入れて、男子は六人だぞ」

雪那「まあ、元々ここは女子高だからな。しょうがないだろう。それより、早く行こうぜ」

義亮「ああ、」

1年2組の扉の前に二人はいた。窓から様子をみる限り、今の所女子しかない。

雪那「あの中に入るのは勇氣いるな」

義亮「マジで女子しかない。どうする?」

雪那「ここは、こう考えればいんだ。俺達のハーレム天国の始まりだーとか」

義亮「だが、女子高といえば、同性愛が有名だぞ。どうするんだよ。マジで俺たち空気だぞ」

雪那「確かに、」

二人でアホなことを言っていると一人の女子が話しかけてきた。

純「いや、あんまり気にしないほうがいいんじゃないの？」

そこには元気そうな少女がいた。

純「2組でしょ、」

義亮「ああ、そうだが、」

雪那「君も？」

純「うん、あたし鈴木純。よろしく」

義亮「沢渡義亮だ。」

雪那「き、霧生雪那」

雪那だけ少し戸惑いながら言ったが、純はあんまり気にして無かった

純「ほら、入ろう」

純に進められるまま扉を開くとまた誰かとぶつかった。何と云うか最近だれかとぶつかることが多すぎる。

梓「いたい。」

ぶつかった少女はおでこを押さえていた。この少女に見覚えがあるずっと気になっていた少女だ。

雪那「う、ごめんなさい。」

梓「いえ、私も……あなたは、この前の……というかその顔……見覚えがある。もしかして、ゆき？」

雪那「そのあだ名は……」

雪那の「ゆき」とあだ名は義亮以外は知らないはずだったが……だが、思い出した。このあだ名を付けた少女のことを……

雪那「あ、梓？」

梓「うん、久しぶり。ゆき。」

梓は嬉しそうに笑った。俺も戸惑いながら笑い返した。

雪那「思いっきり忘れてたよ。ようやく思い出せた。久しぶりだな。梓」

第1話 終

第1話 再会の二人（後書き）

六甲水「はい、梓と雪那の再会でした」

梓「というか、ただ単に二人して忘れていただけなんですね」

六甲水「まあ、雪那は忘れっぽいという設定ですし」

雪那「いや、名前を覚えづらいただけ。ちなみに梓が忘れていた理由は？」

六甲水「雪那の変わりっぷりに気づかなかっただけです」

梓「そう、なんだ。」

六甲水「次回は、平沢姉妹ともう一人の男性キャラとの接点です」

雪那「というと義亮か？」

六甲水「いや、また別なキャラです」

第2話 平沢姉妹との再会（前書き）

六甲水「さあて、2話だ」

義亮「所で、俺のキャラ設定は？」

六甲水「そのうちやる」

義亮「うわ、なげやがった」

第2話 平沢姉妹との再会

昼休み、俺は廊下を歩いていた。その後ろに梓がついてきている。

梓「ねえ、ゆき。何で怒っているの？」

そう、梓の言うとおり俺は少し機嫌が悪かった。理由は……

雪那「頼むからそのあだ名はやめてくれ。恥ずかしんだよ」

梓「えっ、もしかして、さっきから怒っているのはあだ名で呼ばれたから？」

雪那「結構恥ずかしんだぞ。「ゆき」とか恥ずかしいんだよ。女の子みたいで」

梓「ご、ごめん。でも、今から違う呼び方をするのも……」

梓は少し困った表情でいる。俺はため息を付き梓の頭をなでた。

雪那「別に俺の方も慣れればいんだから、無理して違う呼び方をしなくてもいいぞ」

梓「うん」

そんなやり取りをしているうちに購買についた。

梓「ゆき、お弁当は？」

雪那「忘れた。だから今日はこれだ。」

梓「そうなんだ？」

唯「あつ、今朝の人だ」

唐突に二年生の女子生徒に話しかけられた。というか見覚えがある。今朝ぶつかった人だ。

雪那「えっと、柊さんでしたっけ」

俺が名前を言うと先輩はずっこけた。

唯「違うよ。平沢だよ。」

雪那「すみません。人の名前を覚えるのが苦手で、」

唯「別にいいけど、そっちの娘は？」

梓「あつ、中野梓です。平沢先輩こんにちわ」

梓は礼儀正しく挨拶をした。唯先輩も笑顔で返してきた。

唯「二人も購買のパン？」

雪那「いえ、俺だけです。平沢先輩も？」

唯「つい、お弁当忘れちゃって……」

すると、憂がピンクの変な模様のお弁当の袋を持ってきた。

憂「あつ、お姉ちゃんいた。」

唯「ああ、私のお弁当。憂が持ってたんだね。よかった」

憂「玄関に置きっぱなしだったよ。あれ？中野さんに霧生さん？」

梓「あつ、同じクラスの……姉妹だったんだ」

雪那「確か、平沢………ウーロン？」

梓「いや、違うから、平沢憂だよ。」

梓はやりわりと突っ込んできた。憂も何だか苦笑いしている。

梓「ごめんね。平沢さん。この人、名前覚えるの苦手だから」

憂「ううん、大丈夫だよ。あと、憂でいいよ。」

梓「えっ、それじゃあ、憂。」

梓は少し照れながら呼ぶと憂は笑顔で、

憂「うん、梓ちゃん。」

と笑顔で返してきた。その光景を見て、唯先輩は何だか笑顔だった。とりあえず、理由を聞いてみた。

雪那「あの、何で笑ってるんです？」

唯「えっ、違うよ。せつちゃん。嬉しんだよ。友達ができるのを見ると」

確かに、昔は少し暗かった時期の梓のことを思い出すと俺も嬉しくなった。だが、あることに気がついた

雪那「あの、さっきの『せつちゃん』ってなんですか？」

唯「え、あだ名だよ。刹那だからせつちゃん」

まあ、まだ「ゆき」よりはましだな。すると梓があることに気がついた。

梓「ねえ、もう一個の青い袋のやつは誰の？」

憂「えっ、ああ、従兄弟の子の奴だよ同じクラスの、真堂霧夜って言う子だよ」

梓「真堂くんなら、屋上に行くの見かけたけど、」

雪那「なあ、ウチのクラスにトマトなんて奴いたっけ？」

梓「いや、真堂くんだよ。本当に名前間違えるのすごいね」

梓は呆れながら言った。

雪那「どうせ届けるんだったら、俺達も行くよ。」

憂「そうっじゃあ、お姉ちゃんも行くっ」

唯「うん」

第2話 終

第2話 平沢姉妹との再会（後書き）

六甲水「さて、出てきたね。三人目のオリキャラ」

義亮「なんとというか、あと三人も出してキャラが安定できるのか？」

六甲水「頑張る。」

義亮「はあ、じゃあ、次回は…謎の三人目に付いてだな」

六甲水「そうだ。じゃあ、3話で」

第3話 真堂霧夜（前書き）

六甲水「第3話は平沢姉妹と梓と雪那と霧夜しか出ません」

義亮「おい、俺は？」

六甲水「大丈夫大丈夫。次の話はキャラ設定で、その次に出すから……」

義亮「頼むぞ」

第3話 真堂霧夜

第3話 真堂霧夜

俺と平沢と梓の三人で屋上に向かうことになった。ちなみに唯先輩は途中に会った同じ部活の人が向かいに来たみたいで来れなくなつた。

雪那「そういえば、真堂ってどんな奴だっけ？」

梓「ん、少ない男子の中で話さなかつたの？」

雪那「いや、梓に「ゆき」というあだ名で呼ばれ続けたからな。機嫌悪くなつて話す暇がなかつた。」

憂「でも、「ゆき」ってあだ名可愛いよ」

雪那「平沢。俺はそれが嫌なんだ。何か女の子みたいで……」

憂「そうなんだ。あつ、屋上だ」

憂が屋上の扉を開くと屋上には何人もの女子生徒がいたが、柵のところには一人の男子生徒がもたれかかっていた。その男子生徒は少し目付きが悪く、ボサボサした髪をしている。俺は梓に耳打ちをした。

雪那（あれが真堂か？）

梓（うん、そうだよ。でも、何してるんだろう？）

すると憂が真堂の近くまで行き、声を掛けた。

憂「霧くん。こんなところで何してるの？」

真堂は憂を見上げて言った。

霧夜「いや、弁当忘れたからお腹がすいていることを忘れようとしてた。」

憂「そうだったんだ。」

雪那「いや、明らかに目を開けてたよな」

梓「うん、」

梓と話していると憂は持っていた弁当を霧夜に渡した。

霧夜「届けてくれたのか？」

憂「うん、忘れてたから……」

霧夜「ありがとうな。憂。所で後ろの二人は？」

霧夜が俺達の存在に気がついた。とりあえず、話掛けた

雪那「平沢の付き添いだ。えっと、真堂……霧谷」

霧夜「いや、そんな名字が二つある名前じゃない。霧夜だ」

梓（すごい、普通に返した）

霧夜「お前、名前覚えるのが苦手だろ」

雪那「ああ、でも、二回聞いたら覚えられる。」

霧夜「何つつか、友達出来たのかそれで……」

雪那「いや、あんまりいない。高校に入って友達を沢山作ろうと思つてな」

霧夜はただ、俺の目を見ていた。そして、立ち上がり、

霧夜「じゃあ、友達になるか？雪那」

握手を求めた。俺は笑顔で握り返し、こう言った。

雪那「よろしくな。えっと、キリでいいや。」

霧夜「いいあだ名だ。じゃあ、教室に戻って飯でも食つか？」

雪那「だな。」

教室に戻るときに、キリが平沢に質問してきた。

霧夜「所で、唯姉さんは？」

憂「えっ、教室に戻ったよ。」

霧夜「よかった。あんまり会いたくないんだよな」

キリは少し暗い表情をしていた。俺は気になったので聞いた。

雪那「そんなに苦手か？唯先輩。面白い人だけど、」

俺がそう言うとキリは額に手をやりながら……

霧夜「お前は、唯姉さんをあんまり知らないからいいよ。あの人は結構滅茶苦茶だ。」

見た感じそんなに滅茶苦茶な感じは……少し変わっていたけど

梓「てか、早く戻らないとご飯食べる時間がないよ」

第3話 終

第3話 真堂霧夜（後書き）

六甲水「はい、真堂霧夜登場です」

霧夜「というか、話的にどうなるんだ？」

六甲水「何が？」

霧夜「いや、誰と誰がくつつくのかなって、まあ、雪那は中野と言
うのは分かるけど、俺は？」

六甲水「うーん、今のところ憂かな」

義亮「俺は？」

六甲水「さあ、」

義亮「ひどい」

霧夜「次回は俺と義亮のキャラ設定な」

キャラ設定その2（前書き）

六甲水「今回は義亮と霧夜のキャラ設定です」

義亮「やつとか」

霧夜「残りのメンバーもやるんだよな」

六甲水「多分」

キャラ設定その2

キャラ設定その2

沢渡義亮さわたりぎりょう 1

雪那の中学からの親友。雪那の「ゆき」というあだ名を知っている一人。

基本的に真面目そうだが、かなりのめんどくさがり屋、髪を切るのも面倒で腰まである髪をいつも縛っている。勉強はあまりできない。だが運動はかなり出来る。いつも雪那と霧夜とつるんでいる。だが教室では雪那、憂、梓、純、霧夜と一緒にいることが多いあだ名はぎーちゃん、亮

真堂霧夜まどうきりや 1

平沢姉妹の従兄弟、憂とは仲がいいが、子供の頃唯に引つ張りまわされ、少し苦手意識を持っている。

目つきが悪いが、かなりいい人。勉強と運動は並程度。家事なども基本くらいには出来るが憂に仕事を取られてしまっている。あだ名はキリ、やっくん

キャラ設定その2（後書き）

六甲水「はい、キャラ設定でした」

霧夜「というか、義亮の髪ってそんな理由だったのか」

義亮「ああ、そうらしいな」

六甲水「じゃあ、次回は部活動見学です。二人とも何に入るのだからな？」

第4話 部活動見学（前書き）

雪那「今回は部活動見学か。」

六甲水「部活か。めんどくさいから高校は帰宅部だな」

霧夜「ところで作者、俺のあだ名の「やっくん」ってなんだ？」

六甲水「あんまり思いつかなくて、某漫画の人形の名前から取ったから」

雪那「そつえば、俺達の名前の由来は何だ？」

六甲水「それはおいおいに、」

第4話 部活動見学

第4話 部活動見学

梓と再会し、キリと友達になって一日が過ぎた昼休み、俺と梓とキリと義亮と憂と純で机をくっつけて食事を取っていた時、純の一言から始まった。

純「そういえば、皆は部活どこに入るか決めたの？」

雪那「まだだけど、」

梓「私も……まだかな。ちょっと気になる部活があるけど、義亮は？」

義亮は長い髪を後ろで纏めながら梓の質問に答えた。

義亮「俺はめんどうだからパス。」

梓「面倒って……」

雪那「義亮は基本めんどくさがり屋だ。あの髪も面倒という理由で切ってないからな」

純「えっ、そうなの？」

純は驚いていた。キリも一緒に驚いている。

霧夜「てつきり、何かの願掛けかと思ったんだけど」

義亮「別にそんなのねえよ。雪那も言ったように切るのが面倒なんだ。まあ、別に長くて困らないし」

髪を縛りおえ、義亮は買ってきた焼きそばパンを食べ始めた。

憂「それにしても、綺麗な髪だね」

純「というか、髪洗うの大変なんじゃ……」

義亮「大変だけど、わざわざ髪を洗うために切るのが面倒だから、」

義亮はパンを食べ終え、髪の手入れを始めた。とりあえず話を戻すことにした。

雪那「それで、えっと、ジエンガは部活決めたのか？」

純「いや、ジエンガって「ジ」と「ン」しか合っていないから。てか名前覚えようよ」

梓「これが雪那の欠点だから気にしない方がいいよ。注意すれば治るし」

純「まあいいや、私は…ジャズ研かな？キリは？」

純がキリに向かって質問すると霧夜は少し困った顔をして、

霧夜「とりあえず唯姉さんに強制的に入部させられる前にどうにかしたい。憂、代わりに入ってくれ」

憂は少し困った顔をして答えた。

憂「私は家事とかあるし、」

霧夜「だよな、」

純「とりあえず、部活動見学にでも行ったら？意外と面白そうな部活があるかもしれないし」

雪那「そうだな、そうするか」

純の提案でとりあえず、部活動見学をすることにした俺と梓とキリと義亮の四人（憂と純は用事があるから来なかった）は、とりあえず、どんな部活があるか見てまわるため部活の勧誘が盛んな廊下を通っていた。

雪那「いっぱいあるんだな」

義亮「というか必死なんだなみんな、」

梓「そうだね、」

霧夜「まあ、結構面白そうな奴とかあるぞ。試しにバスケットとか」

義亮「去年まで女子高だから、部員は女子しかいないんじゃないのか？」

義亮は面倒くさそうに言うと、キリは何故だか真面目な表情で…

霧夜「唯姉さんから逃げられるなら女子がいる部活にだって入るぞ俺は」

雪那（キリ。そんなに唯先輩が嫌か？）

とりあえず、外に出ると勧誘の人で一杯だった。聞こえてくる声も勧誘の声でいっぱいだった。

「バレエ部入部してください」

「茶道部もどうぞですか……」

「軽音部、どうぞですか？」

「……バトン部も部員募集中です」

なんか、いま変なものがあつたような……

とりあえず振り向いてもう一回見てみると、バレエの服を着た先輩、うん、可愛い。茶道部は和服、バトン部はジャージ、軽音部は……着ぐるみ

雪那「何か変な集団が軽音部とか言ってるが……」

梓「うん、けいおん部じゃないの？」

義亮「てか、キリは？」

急に居なくなつたキリ。あたりを見渡してみるとキリは、陸上で使われるクラウチングスタートの体制を取っていた。

雪那「キリ、何してるんだ？」

キリは目を閉じながら答えた。とうるか傍から見たら変人だぞキリ

霧夜「悪い、俺は逃げなければならな……」

鶏の着ぐるみ「あつ、やつくんだ。」

鶏の着ぐるみを着た人がキリに近づこうとした瞬間、キリはダツシユで逃げ出した。

義亮「凄い逃げ足だ」

鶏の着ぐるみの顔を外すと唯先輩が顔を出した。とうるか、よく顔を見ずに分かったなキリ。

唯「あれ〜？やつくん逃げちゃった。」

雪那「唯先輩。こんにちわ」

唯「あ、えつと、せつちゃんだ。」

雪那「何でそんな格好してるんですか？」

唯先輩は人差し指を唇に当て、答えた。

唯「顧問の先生がインパクトを付けたいんだって、」

梓は呆れながら言った。

梓「いや、インパクトありすぎて逆に怖いですよ」

梓がそう言つと唯先輩は驚き、

唯「だからさっき憂が逃げたんだ。」

義亮「所で、ビラ配りいいんですか？さっきから他の人がこつちを見てますけど」

唯「あつ、そうだった。えつと、」

義亮「沢渡義亮です。平沢先輩」

唯「うん、よろしくね。ぎーちゃん」

義亮「ぎーちゃんって」

なるほど、義亮だからぎーちゃんか。唯先輩らしい。唯先輩は俺達にビラを配り、元の位置に戻った。

雪那「けいおん部か。面白そうだな。」

梓「……私入ろうかな？」

雪那「何でだ？」

梓「去年辺り友達と一緒に学園祭に参加したんだけど演奏が凄かった覚えがあるんだ。」

梓は淡々としゃべりだした。

雪那「そういえば、小雪も見にいったな。何か凄いもの見たって聞いたけど、」

梓「…ねえ、ゆき。一緒に入らない？」

雪那「……まあ、楽しそうだから入部するか。義亮は？」

義亮「楽器できないぞ。」

梓「多分大丈夫じゃないの？」

義亮「そうか？まあいいや、入ってみるか」

第4話 終

第4話 部活動見学（後書き）

雪那「何と云うか、最後手抜きか？」

六甲水「き、気のせいじゃないですか？」

義亮「てか、俺も入るのかよ。」

六甲水「話的に面白そうだから、」

雪那「とりあえず、次回は新感ライブが終わったあとの次の日から
だな」

六甲水「義亮が偉いことに」

第5話 けいおん部の先輩（前書き）

六甲水「ついに、唯以外のけいおん部と対面だね」

雪那「所で義亮が大変なことになるって本当か？」

六甲水「まあ、大変ちゃ、大変だね。」

義亮「何が起こるんだ」

六甲水「それはあとのお楽しみ」

第5話 けいおん部の先輩

第5話 けいおん部の先輩

新観ライブが終わり、次の日に俺と梓と義亮の三人は入部届けを出しに音楽室の前にいた。

雪那「結構ライブの方とか凄かったな」

梓「そうだね。唯先輩と黒髪の先輩のダブルボーカルが一番すごかった」

梓は嬉しそうにはしゃいでいた。まあ、確かにあんなに凄い演奏を聞かされてはしゃぐ気持ちはわかるが、まさかあの唯先輩があんな演奏をしていたんだから……

義亮「というか、何で入らないんだ？」

梓「だって、何だか緊張しちゃって」

確かに俺達は唯先輩の人を知らない。唯先輩があんな感じだから……他の部員もあんな感じなのだろうか？少し心配になってきた。

義亮「とりあえず、中に入ろうぜ」

梓「そうだね。」

梓はおずおずと音楽室の扉を開くと、

梓「あの、入部希望なんですけど……」

律「か、確保おおおー……」

梓「きゃああああ」

いきなり現れた前髪を上げ、カチューシャをつけてる女子に抱きつかれた梓。俺と義亮はただ呆然と見ているしか無かった。

梓「ちょ、ゆき。助けて」

雪那「いや、さすがに女性に手を出すのは……」

漣「こら、嫌がつてるだろう。」

すると、新観ライブで唯先輩と一緒にダブルボーカルをやっていた黒髪の先輩が前髪を上げた先の首を猫つかみみたいにして、梓から引き離れた。

雪那「大丈夫か梓」

梓「な、何とか」

漣「変な先輩で悪かったな。えっと、」

梓「あ、中野梓です。」

漣「中野さん。あと、後ろのは……」

黒髪の先輩は俺達の方を向いた。

義亮「俺は沢渡義亮です。んで、こっちは」

雪那「き、霧生雪那です。三人とも入部希望で」

澗「うん、私は秋山澗。とりあえず中に入ったら？」

澗先輩に言われるままに、中に入るとさっきの梓に抱きついてきた先輩と金髪に眉毛が太い先輩と唯先輩が椅子に座って、紅茶を飲んでいた。唯先輩は俺達を見るやいなや、嬉しそうな表情を浮かべていた。

唯「入ってくれたんだ。有難うね。梓ちゃん。ぎーちゃん。せつちやん」

雪那「まあ、面白そうだったし、何か始めようかなって思っていたんで……」

紬「お茶どうぞ。」

椅子に座らせられ、金髪の先輩が紅茶を持ってきてくれた。

紬「私、琴吹紬っていいいます。みんなからムギって呼ばれてるわ」

律「私は部長の田井中律。とりあえず、入部希望の紙もらっておくね」

梓「はい、よろしくお願いします。」

雪那「よろしくお願いします。秋先輩、田中先輩、ムギ先輩。」

見事に名前を間違えると律先輩と漣先輩が机に頭をぶつけた。

律「思いつきり名前間違ってるから」

漣「というか、名前いったばっかりなのに」

梓「ゆきは名前を間違えるのが得意なんです」

義亮「ある種の才能だな。だけど、琴吹先輩だけ間違えないなんて……」「っ」だけぬかしたのか」

唯「でも、漣ちゃんの秋先輩は何だか可愛らしいよね」

唯先輩がフォロー？をいれると漣先輩は嬉しそうだった。

漣「……………可愛い」

律「あー、そういえば、三人とも楽器は？」

義亮「俺以外はできますよ。二人ともギターだっけ？」

梓「うん」

雪那「ああ、」

唯「じゃあ、二人とも引いてみて、ほらギター」

唯先輩が梓に自分のギターを渡し、梓が軽く弾いてみる。

律（う、うまい）

唯（わ、私より上手い）

梓「あの、駄目でしたか？」

唯「ん、まだまだかな」

漣&律（うおーい、どこからそんな自信が）

梓「じゃあ、次雪ね」

雪那「ん」

梓にギターを渡され、軽く弾いてみる。あんまり練習して無かったからちよつとへたくソかな？

漣（う、上手い。梓の数倍は）

律（唯の数十倍だな）

唯（わ、私の立場が……）

雪那「ふう、結構弾いてないから自信がないけど、どうでした。」

漣「いや、凄すぎだ」

律「こりゃあ、いい部員が入ったな」

何故か拍手を送られた。

紬「それで、義亮くんは、初心者だけど、どんな楽器をやってみたいの？」

義亮は少し悩み、答えた。

義亮「ベースとかいいですか？」

漣「ああ、確かにギターが三人になったからな。ベースも増えるのもいいかも。でも買えるのか？」

義亮「大丈夫です。雪那の親が楽器店で働いているんで、安く売ってもらいます」

律「楽器店で働いてるって、いわゆるサラブレットか」

雪那「梓もです。」

梓「はい、」

漣「サラブレットが二人。何か凄いことになるな。でも、私達の部活結構ゆったりしてるけど大丈夫か？」

梓「あ、唯先輩を見ていたら予想出来ましたけど、それでも入りたいです」

雪那「結構平気です。」

義亮「俺もだ」

漣「ならいいんだけど、もう一個問題が……」

何故か漣先輩は躊躇していた。だが、俺はある程度予想できた。唯先輩が言っていた顧問か。

さわ子「みんないる？あ、あら新入部員？」

音楽室の扉が開き現れたのは、メガネを掛けた綺麗な先生だ。

さわ子「いらっしやい。顧問の山中さわ子です。」

梓「あ、よ、よろしくお願いします」

さわ子（ネロミミ似合いそう。あとはこっちの男子は……どっちも美形だけど、こっちの黒髪の男子……ちょっと、試してみよう）

さわ子「ねえ、その黒髪の子。ちょっといいかな？」

義亮「あ、はい。」

義亮は先生と一緒に音楽室を出ると外から、

義亮「ちょ、先生。何でそん……」

さわ子「きつと、似合っわよ。ほらきな……」

数分後

さわ子先生と戻ってきたのは、女子の制服を着た義亮だった。化粧もされている。

さわ子「沢渡義亮くん改め、沢渡亮子ちゃんよ」

義亮「……………」

俺と梓は必死に笑いをこらえていた。律先輩は呆れて、唯先輩はお菓手に夢中、紬先輩も呆れていたが、漣先輩だけ

漣「き、綺麗だ」

義亮「み、見ないで……………」

こうして、部活動初日を終えた。そして、帰り際に律先輩に歓迎会をやること連絡を受けたのだった。

第5話 けいおん部の先輩（後書き）

亮子「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

雪那「ぷっ、ど、ドンマイ。ぷっ、」

梓「に、にあってるよ。ぷっ、」

亮子「作者アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

六甲水「言ったでしょ、大変な目に会ってる。」

亮子「何で、女装なんだああああああああああああああああああ
あ」

霧夜「まあ、義亮のことは置いて、次回も俺と憂の出番はない
のか？」

六甲水「いや、今回は霧夜と憂メインだよ。デートだ。」

霧夜「で、デートって」

憂「そ、そんな。」

六甲水「デートの次は歓迎会。その後は男性オリキャラの二人が登場。」

雪那「あと一人は？」

六甲水「まだ決めてない」

第6話 霧夜と憂（前書き）

亮子「・・・・・・・・・・・・・・・・」

霧夜「まだ落ち込んでる」

六甲水「アレは気にしないでください。今回は霧夜と憂ちゃんのメインです。」

雪那「ちよくちよくメイン回入れるのか？」

六甲水「まあ、そうするつもりだね」

第6話 霧夜と憂

第6話 霧夜と憂

日曜日、10時過ぎに目覚め、下に降りると憂がリビングで掃除をやっていた。

憂「あ、おはよう。霧夜くん」

霧夜「おはよう。憂。唯姉さんは？」

憂「お姉ちゃんなら雪那ちゃんと梓ちゃんと義亮くんの歓迎会だって言っただけだよ」

霧夜「あいつら、入ったんだ。」

そう言いながら、小腹が空いたので冷蔵庫を開けながら朝飯を探していた。

憂「ご飯なら用意してあるよ。」

霧夜「そうか？つっても時間的にはおやつになるんじゃないね」

憂「あはは、そうだね。霧夜くんはこれからの予定は？」

霧夜「んー、特には？憂は？」

憂「私はこれから隣のデパートまで買い物に行くよ」

エプロンを外しながら憂は言った。俺もどうせやることんがないし

.....

霧夜「俺も暇だから付きあうよ」

憂「え、そう。じゃあ、早く着替えなきゃね」

霧夜「ああ、」

着替えて、俺と憂は電車に乗り、隣町のデパートに向かった。デパートまでは歩いて十五分くらいのところにある。歩いていると憂は何故だか嬉しそうだった。

霧夜「どうした？何だか嬉しそうだけど、」

俺が聞くと憂は笑顔で答えた。

憂「えへへ、霧夜さんと一緒に出かけるの久しぶりで……」

霧夜「そういえば、そうだな。でも一緒に登校してるじゃん」

憂「まあ、そうだけど、」

そんな事を話しているとあっという間にデパートにたどり着いた。

霧夜「そういえば、何買うんだ？」

俺が聞くとちよっと憂は恥ずかしそうに

憂「えっと、洋服と………下着かな」

下着という言葉聞いて俺も少し恥ずかしくなった。

霧夜「さすがに俺がランジェリーコーナーに行くのはきついから待ってるよ」

憂「う、うん」

洋服は一緒に回る事になったが、ランジェリーコーナーでは俺は入り口で待っている事になった。

霧夜「何つつか、派手な下着とかあるな」

頑張って目線に入らないようにしたが、どうしても入ってしまう。というかさつきから女性の目線が……その時だった。

少女「ねえ、お兄さん。何やってるの？」

見知らぬ少女に声をかけられた。少女の見た目は真っ白な肌に白い毛糸の帽子と白いワンピースを着た小柄な少女だった。

少女「傍から見ると変態さんだよ。どうせだったら、近くのエレベーターにいたら？」

何故見知らぬ少女に助言をもらうんだ俺は……まあ、良い提案だったし、憂にメールを出して少女の言うとおりエレベーターの前に待つことにした。しばらくして、

憂「お待たせ、大丈夫だった？」

霧夜「ああ、何とかね。これからどうする？」

憂「とりあえず、ご飯にしようか。」

霧夜「そうだな」

デパートの地下に降り、飲食店で食事を摂ることにした俺達、俺はラーメン。憂はオムライスだ。

憂「ここのオムライス美味しんだよ」

霧夜「じゃあ、一口。」

憂「はい、あーん」

憂が自分のスプーンからオムライスを一口掬い、俺に食べさせてくれた。何だか恥ずかしいぞ憂

霧夜「お、美味しいな。」

憂「そうだね。これからどうする？」

霧夜「特にやることないし、ここら辺回って帰るか」

憂「そうだね。」

丁度良くデパートの近くに自然公園があるらしく、そこに向かうことになった。

デパートから出て、しばらく歩いていると、後ろから声を掛けられ

た。

少女「ねえ、そのバカップル。」

誰だ？バカップルなんて言ったのは。振り向いてみるとさっき話しかけてきた少女だった。

霧夜「バカップルって…なんの用だ」

少女「ちよつと、道教えて欲しいんだけど、自然公園までどうやっていけばいいの？」

少女は少し困った顔をしていた。憂は笑顔で笑顔で答えた。

憂「私達もそこに行くから一緒に行こう」

少女「そうなの。わーい。」

霧夜「何だ？友達と待ち合わせか？」

少女「ううん、少し用事で、あつ、私小雪っていいいます」

憂「平沢憂です。よろしくね」

霧夜「真堂霧夜。」

小雪「憂姉に、霧兄だね。よろしく」

第6話 霧夜と憂（後書き）

六甲水「傍から見たらマジでラブラブだね。お二人は」

霧夜「うるさい。」

憂「えへへ、」

小雪「所で私についてはキャラ設定やってくれるの？」

六甲水「次の話が終わったらね。」

第7話 ゆきとこゆ（前書き）

六甲水「前回登場した小雪の正体がついに」

雪那「いや、普通に誰なのかわかるぞ」

小雪「そうそう、」

霧夜「というか、俺と憂もけいおんメンバーと合流か？」

六甲水「YES」

梓「どうなることだか」

第7話 ゆきとこゆ

第7話 ゆきとこゆ

俺と梓と義亮はけいおん部の先輩たちと一緒に自然公園に遊びに来ていた。

梓「広いね」

雪那「ああ、というかこんな所合ったんだ」

透「この前見つけたんだ。所で沢渡は何をしてるんだ？」

透先輩が義亮の様子を見ていた。義亮は何故か辺りをキョロキョロしていた。

義亮「いえ、あの先生いないですよね」

律「もう苦手意識が……梓はどうなんだ？」

梓「あ、私はネコミミ付けられただけですけど、さすがにアレと比べると……」

それは、義亮が女装されたあとのことだった。

さわ子「梓ちゃんはこれね」

そう言って渡されたのはネコミミだった。梓は少し戸惑っていたが……隅のほうで落ち込んでいる義亮を見て、

梓「アレに比べるとまだこっちの方が……」

そう言つて、猫耳を付けさせられ、さらに……

律「にゃ〜つていつてみて、にゃ〜つて」

少し戸惑いながら梓は……

梓「にゃ、にゃ〜」

梓の猫マネにときめく先輩たちと先生。さらに唯先輩は

唯「あだ名はあずにゃんね」

梓「あの、ゆき……」

俺は言つとあまりの可愛さに携帯で写真を撮ってしまう仕末。

梓「ちょ、何撮ってるの」

雪那「すまん。かわいすぎる。」

梓「堂々と言わないでよ」

そんな事が初日にあつたのだつた。

雪那「いや、あの時の梓は可愛かつたな」

梓「早く消してよ。」

雪那「やだ。」

梓「いいから、」

律「何夫婦喧嘩してるんだよ。」

雪那&梓「夫婦じゃない」

唯「そんなことより、遊ぼうよ」

唯先輩は無邪気に言ってきた。しょうが無いので誘われるまま俺と梓も一緒にフリスビーをやることに……

律「よし、次は遠くに飛ばすぞーほら」

律先輩が思いつきり投げると見事に遠くまで飛んでいき、唯先輩は走って取りに行った。

唯「りっちゃん、飛ばし過ぎだよ」

霧夜「ここが、自然公園だぞ」

小雪「広いね。」

憂「そういえば、お姉ちゃんたちもここにいるかも」

霧夜「まじかよ。」

少し嫌な予感がした。すると、どこからともなくフリスビーが飛んできて目の前に落ちた。

霧夜「フリスビー…誰か遊んでるのか？」

すると、それを取りに来た唯が現れた。

唯「ごめんなさい。ってやっくん。それに憂も」

霧夜「唯姉さん。」

唯「どうしたのこんな所に？」

憂「ちよつとお散歩」

唯「そうなんだ。そっちの子は？」

唯姉さんは小雪を見ると、小雪は笑顔であいさつした。

小雪「小雪です。さっきそこでお二人に会ったんです。」

唯「そうなんだ。三人も一緒に遊ぼうよ」

霧夜「はあ、しょうがないか。」

律「唯の奴遅いな」

フリスビーを取りに行ってからまだ戻ってこない唯先輩。少し心配になってきた。

梓「探しに行きます?」

律「おつ、戻ってきた。憂ちゃんもいるぞ」

梓「本当だ。それに霧夜くんも。もう一人は……」

雪那「…あれは、」

唯先輩と一緒にいるあの女の子に見覚えがあった。あれは……

すると少女が唯先輩からフリスビーを受け取り、俺にめがけて飛ばしてきたのだ。それはフリスビーの速さを超えたものすごい速さだった。避けることができず、思いっきり顔面に命中した。

梓「ゆき」

律「大丈夫か」

漣「おーい、何かすごい音がしたけど、てか、大丈夫か?」

音を聞きつけ、他の人達も集まってきた。そして、唯先輩たちも合流した。

霧夜「おいおい、何つう投げ方だ。謝らないと」

小雪「何で?」

霧夜「なんでって……てか、義亮どうした?なんか怯えてるけど」

全員が義亮を見ると確かに小雪を見て怯えていた。

義亮「まさか、何でいるんだよ小雪ちゃん」

小雪「久しぶりですね。義兄。」

霧夜「知り合いか？」

雪那「つう、いきなり何するんだよ。こゆ。」

小雪「雪兄が私に黙って置いていくのが悪い。」

小雪が子供っぽく怒っている。

紬「もしかして、彼女さん？」

ムギ先輩がそう言うとは梓は何故かショックを受けている感じをしていた。だが、断じて違うこいつは…

雪那「違いますよムギ先輩。こいつは俺の妹です」

小雪「霧生小雪です。兄がお世話になってます」

小雪のことを言うと全員が動揺を隠せなかった。それもそつだ。明らかに俺と似ていないんだから

律（い、妹って、似てないけど、）

漣（それも、妹に見えない。絶対二人で並んで歩いたら恋火同士に見えるぞ）

ムギ（恋人じゃなかったんだ）

梓（こ、小雪ちゃんってあの……）

唯（可愛い子だな）

小雪は梓に近づき、笑顔になった。

小雪「お久しぶりです。梓姉。」

梓「う、うん。久しぶり。」

こうして、小雪たちを混ぜての歓迎会は終りを迎えた。帰り道に……

小雪「ねえ、雪兄」

雪那「何だよ。」

小雪「梓姉に告白してないの？」

小雪の言葉に少し戸惑った。

雪那「するか。あいつは俺のことどう思っているか知らないし」

小雪「ふーん」

小雪（意外と脈あるとおもっただけだなあ、もう少し観察してみよう）

第7話 ゆきとこゆ（後書き）

六甲水「小雪の正体でした。」

小雪「これからも私は活躍するの?」

六甲水「はい、意外と活躍します。」

雪那「というか、俺のキャラ設定の時に小雪の名前が出てるんだから分かるだろ」

六甲水「まあ、そうですね。次は小雪のキャラ紹介とオリキャラの名前の由来です」

キャラ設定その3（前書き）

六甲水「今回は小雪ちゃんとオリキャラの名前の由来です」

小雪「私の可愛さに心奪われるなよ」

霧夜「所で、義亮が小雪ちゃんのことをビビっていたのは？」

小雪「えへへ、それは、今から紹介するよ」

キャラ設定その3

キャラ設定 その3

霧生小雪きりむぎこゆき1

雪那の妹で、お兄ちゃん大好きっ子。ただ寂しがりいで、雪那がどこかへ行くと付いて行きたがる。

梓とも幼なじみで、梓の恋愛相談に乗る。見た目は小柄で明らかにか弱そうだが、実はかなりの力持ち。中学校の時に義亮が小雪を意地悪していた時があったが、すぐにフルボッコにした。

年上の人に対して、く兄、く姉と呼んでいる。雪那の事は雪兄と呼び、雪那はこゆと呼んでいる。

オリジナルキャラの名前の由来

霧生雪那

雪那は最初刹那という漢字にしようとしたけど、あるロボットアニメの主人公とかぶるから、こんな感じに、霧生は、なんとなく思いついたから

沢渡義亮

沢渡の部分は、ある漫画に登場する女性キャラから取りました。義亮は変換すると技量となるので名前ばくした。特に意味はないです。

真堂霧夜

真堂は何となくかつこいい感じで付けました。霧夜は、雪那とかに
キリと呼ばせるために付けました。

霧生小雪

兄が雪那だから、妹もゆきの部分を使おうとして、小雪に……

キャラ設定その3（後書き）

六甲水「以上がキャラ設定と名前の由来でした」

小雪「何か本当に思いつきで付けた名前があるんだね」

雪那「霧夜はキリと呼ばせるためとか」

六甲水「さて、何時になったら梓と雪那の中は進展するんだろうね。

小雪「ちゃんは何か考えがあるみたいだし」

小雪「まだ秘密だけどね」

六甲水「次回は、新キャラ二人が登場」

第8話 心と葉（前書き）

六甲水「ついに、四人目と五人目の新キャラ登場」

霧夜「というか、つい最近に小雪ちゃんのキャラ紹介したばかりなのに、この話し終わったらまたキャラ紹介か？」

六甲水「いや、この話し終わったら、みんなで勉強会だね。」

小雪「ねえ、私の出番は？」

六甲水「次の話で出ます」

第8話 心と葉

第8話 心の葉

それは、クラスメイトのある一言によって始まった。

昼休み、俺達が食事を取っていると（義亮、純、憂は今はいない）クラスメイトの一人である。葉渡郁斗に話しかけられた。

郁斗「なあ、綺月見なかったか？」

雪那「ん、綺月？誰だ？」

梓「いや、同じクラスでしょ、あのこの学校に入って一躍有名人の綺月心。漣先輩と並ぶくらいの美少女だって噂だよ。」

梓の話を適当に流すことにした。だが、葉渡は何故か苦笑いをして
いる。

郁斗「美少女…ねえ。」

霧夜「その綺月がどうしたんだ？」

郁斗「いや、アイツに頼まれてたの渡すんだけど、たくっ、あいつ
どこ行っただんだ？」

綺月を心配している葉渡を見て、梓は俺に耳打ちをしてきた。

梓「もしかして、あの二人、付き合ってるのかな」

雪那「ん、そうなんじゃないのか？結構合いそうだし」

梓「やっぱり恋人同士っていいのかな。私も素敵な彼氏とか……」

梓は俺の方を向くと、同時に顔を離し、お互いに顔真っ赤にした。その光景を見てキリは……

霧夜「お前ら何やってるんだ？」

その時だった。突然扉を激しく開けられ、現れたのは黒髪のサイドテールの女子生徒が葉渡に抱きついてきた。

心「た、助けて、郁くん」

郁斗「まずは離れる。綺月」

綺月を引き剥がす葉渡。何か葉渡は嫌がってるように見えるが……

霧夜「それで、どうしたんだ？綺月」

心「真堂くんの中野ちゃん、それに霧生くん。匿って」

霧夜「はあ？何で」

心「いいから、うわ来た。」

和「見つけたわよ。綺月さん」

メガネを掛けた先輩と澁先輩が教室に入ってきた

霧夜「あれ？和姉さん。どうしたんですか？」

梓「それに澪先輩まで」

澪「私は付き添い。」

和「実はこの子が、何人かと野球やってて、ボールが窓ガラスに当たって、割れたのよ。」

澪「それで、この子だけ、逃げ出していたというわけだよ」

全員が綺月の方を見て、綺月は「えへ」と笑った。葉渡はため息を付き、綺月を猫掴みをして、和先輩に渡した。

心「ひどいよ。郁くん。裏切るの」

郁斗「先輩、こいつは絶対に放課後、生徒会室に連れてきますから」

和「分かったわ。」

心「うう、そんな殺生な」

霧夜「いや、お前が悪いから」

こうして、騒動は終わった。そして、次の日のことだった。

心「あ、私トイレ行ってくるね」

心「色々あって、こんな格好してるんだよ。じゃあ、あつて、」

梓「……………」

純「……………」

第8話 心と葉（後書き）

六甲水「新キャラ。葉渡郁斗と綺月心ちゃんの登場です」

郁斗「というか、義亮の女装ネタがやっていただけ、まさかここでこのネタやるとは」

六甲水「前からやりたかったし、とある漫画から参考にしたけどね」

心「それにしても、私達の話もやるの?」

六甲水「まあ、機会があったら、次は勉強会で、雪那と梓の仲が…

…」

第9話 勉強会（前書き）

六甲水「今回は勉強会です」

心「私も登場。それで、ゆきくんと中野ちゃんの仲は縮まるの？」

六甲水「さあ、どうでしょう。」

第9話 勉強会

第9話 勉強会

7月になり、もうすぐ夏休みだが、その前に期末テストがあった。そして、期末テストのことを知ったあるメンバーは……

純「……………」

義亮「……………」

心「……………」

霧夜「何で、この三人は落ち込んでいるんだ？」

梓「テストが近くて落ち込んでるんだって」

雪那「お前ら、勉強して無かったのか？」

郁斗「というか、お前もよく授業中寝てるだろ。勉強は？」

雪那「授業なんて、寝ながら話聞いてれば大体わかるけど、」

純「どんなスキルよ」

義亮「羨ましい。」

心「その頭。私に頂戴」

梓「頂戴って、心。怖いよ」

憂「そんなにテストが心配なら、みんなで勉強会しようか」

憂の提案により、みんなで今日の放課後、図書室で勉強会をする
とになった。

とりあえず、教える側と教わる側に分かれることになった。

教える側 雪那、郁斗、憂

教わる側 義亮、純、心、霧夜、梓

雪那「じゃあ、勉強教えるけど、自身がないところ言ってみる」

義亮&心「全部」

梓「数学かな」

霧夜「現国」

俺と葉渡はため息を付いた。義亮、綺月、お前らどうやってここに
入学したんだ。

雪那「とりあえず、葉渡、その馬鹿二人頼めるか？」

郁斗「ああ、任せろ。」

雪那「俺と憂で残りの二人教えるか。憂、キリ頼む」

憂「うん」

梓「私はゆきに教えてもらおうの？」

雪那「ああ、悪いか」

梓「いや、別に」

憂&霧夜 side

憂は俺の隣に座り、勉強を教えることに、何だかスngoイ緊張するぞ。

憂「で、ここはこうして、キリくん？」

霧夜「ん、ああ、ごめん。」

憂「何か顔赤いけど、どうしたの？」

霧夜「いや別に……」

というか、憂。こんなに顔が近いのに動じないんだな。

霧夜「そういえば、唯姉さんは？」

憂「えっ、ああ、お姉ちゃんなら頑張って山はるって言ってたよ」

霧夜「唯姉さんらしいな」

雪那&梓 side

梓「そういえば、ゆきって、勉強できたんだ」

雪那「いきなりだな。まあ、中学の時は暇があったら勉強だったかな。それにこゆに勉強教える機会があったし」

梓「そうなんだ。あつ、」

梓は消しゴムを取ろうとすると、床に消しゴムを落とした。拾おうと梓と俺の手が重なった。

梓「あつ、」

雪那「あつ、」

消しゴムを取ろうとせず、ただ二人で見つめ合っていた。そして、梓が……

梓「あの、ゆきって、好きな人いるの？」

いきなりそんな事を聞いてくる梓。俺はただ動揺していた。

雪那「ん、ま、まあ、いるのはいるけど、梓は」

梓「わ、私？私は……その、私の好きな人は……ゆ」

心「ジツ」

二人の光景を見つめる心がいた。

雪那「綺月。なにしてるんだよ」

心「私に気にせず、どうぞ。」

俺は綺月の首根っこを掴み、葉渡のところまで引きずった。

雪那「抜け出してたぞ。」

郁斗「悪いな。こいつが落ち着かなくて」

義亮「……雪那。顔赤いけどどうした？」

雪那「いや、別に」

こうして、勉強会は終りを告げた。だが、波乱は起こる気配がしていた。

心『そうなんだよ。いい感じな所まで行ったんだけど、つい見入っちゃって』

小雪「もう、ダメだよ。邪魔しちゃ、でも、これで二人ともいい感じなんだね。」

心『それと今度、けいおん部で合宿やるみたいだよ。』

小雪「知ってる。私もついて行くから。頑張って雪兄と梓姉をくつつける」

第9話 勉強会（後書き）

六甲水「このチキンが、告白しろよ」

雪那「何で、いきなりチキン呼ばわり、てか、綺月が悪いんだろ」

心「えへへ、面白そうで、ねえ、小雪ちゃん」

小雪「うん、霧兄と憂姉もいい感じだしね」

六甲水「次は、小雪の策略が始まります」

第10話 動き出す心 その1（前書き）

六甲水「今回は三部構成」

義亮「タイトルからして、雪那と梓の関係が発展するの？」

六甲水「発展しますよ。ちなみにその1は梓と憂と小雪と律しか出ません」

霧夜「所で、俺と憂の仲は？」

心「私の話は？」

六甲水「そのうち書きますよ」

第10話 動き出す心 その1

第10話 動き出す心 その1

夏の日差しが差す中、今日は梓ちゃんとお出かけです。

梓「あつ、憂。おまたせ。」

憂「あつ、服力ワイイね。」

梓「えへ、ありがとう。」

梓は嬉しそうに言う。

梓「早くお店に入ろう」

憂「うん、」

ファーストフード店に入り、メニューを頼み、一番端の席に座った。

梓「そういえば、今日唯先輩と霧夜くんは？」

憂「お姉ちゃんなら、ぐったりしてるよ。お姉ちゃん、暑いのが手で、クーラーも苦手なんだよ。」

梓「だらけてる姿が目につかぶ。霧夜くんは？」

憂「霧くんなら、お姉ちゃんのお世話だよ。苦手だって言ってるけど、世話好きなんだ」

梓「へえ、そういえば、何で学校で唯先輩と関わるの嫌がってるんだろう」

憂「うーん、学校まで世話をするのが嫌だって言ってたよ」

梓「そうなんだ。私、お姉ちゃんなら澪先輩な人がいいな」

憂「澪先輩優しいもんね」

憂？「律さんは？」

梓「律先輩は……ないかな」

律「ほおー、」

後ろには何故か律先輩がいたのだった。

憂「こんにちわ。律さん」

律「やつほー、外から見えたから来ちゃった」

そう言って、私の頭をグリグリする律先輩にあいさつする憂。

憂「そういえば、今日は澪さんと一緒じゃあないんですか？」

律「澪なら夏期講習に行ってるよ。」

梓「律先輩は行かなくていいんですか？」

律「あたしが？ 夏期講習？ 何で？」

梓「い、いえ、いいです……。」

律から解放され、私はため息を付いた。

憂「そういえば、合宿行くんですよね」

律「うん、今年もムギの別荘で、まあ、今回は義亮と雪那がいるから覗かれないようにしないと」

確かに、男子は着替を覗くイメージがある。でも、

梓「義亮はやりかねないけど、ゆきはしなと思いますよ」

小雪「雪兄は梓姉の着替しかのぞきませんから」

いつの間にか憂の隣りに座る黒髪に淡い水色のワンピースをきた小雪がいた。

律「うお、いたのかよ。」

小雪「実は、梓姉たちが入る前からいました。」

梓「所で、何でゆきが私の着替だけ覗くって言い切れるの？」

小雪「それは……ねえ、」

律「あれですから」

何故か相槌をうつっている律先輩と小雪。いつの間に仲良くなったんだ。

小雪「それはそうと、部長さん。頼みたいことがあるんですが」

律「ん、何？」

小雪は真面目な表情になった。何を頼む気なんだ？

小雪「私も合宿行きたいです」

律「ん、いいよ」

梓「は、早い」

こうして、小雪が合宿に参加

第10話 動き出す心 その1（後書き）

六甲水「小雪、合宿参加決定回でした。」

郁斗「所で、質問いいか？」

六甲水「何？」

郁斗「前話で、何故か純がいなくなってるないか？」

六甲水「…………書き忘れです。気にしないでください」

第11話 動き出す心 その2（前書き）

六甲水「合宿です。」

雪那「小雪のまさかの参加だな」

心「所で、私と郁くんのキャラ設定は？」

六甲水「大丈夫。ちゃんとやりますよ」

第11話 動き出す心 その2

第11話 動き出す心 その2

電車をしばらく乗り継ぐこと、しばらくしてたどり着いたのは明らかにお金持ちが持っていていそうな別荘だった。

梓「でかい」

雪那「大きすぎだろ」

義亮「どんだけの金持ちなんだよ」

律「こりやまた一段とすげえな」

唯「これが去年言ってた借りれなかった別荘だね」

紬「ごめんなさい。その別荘は今年も駄目だったの。多少狭いけど、我慢してね？」

唯&律（まだ上があるのかー）

皆が紬の別荘に驚いてる中、小雪だけがジッと梓と俺を見ている気がした。

雪那「どうした？こゆ。つかれたか？」

小雪「ううん、大丈夫だよ。」

雪那「ならいいんだけど、」

小雪（今回の合宿は雪兄と梓姉の関係をくつつけるためにわざわざ付いて来たんだから）

荷物を置き、俺と義亮は女子メンバーと離れた部屋に泊まることになった。

義亮「そういえば、先輩たちは？」

雪那「遊びにいくつて、さっき降りたときに言ってた気がしたぞ。」

義亮「遊ぶの好きだな」

雪那「とりあえず、俺達も行くか」

別荘から少し離れた場所にある砂浜に唯先輩たちは遊んでいた。

唯「あつ、ぎーちゃん、せつちゃん。早くおいでよ」

そう言つて、青いビキニを着た唯先輩が声をかけてきた。よく見ると女性メンバーの水着は結構可愛い。というか、けいおん部は結構レベルが高い人がいるからな。いつも恥ずかしがってる澁先輩は大胆に黒ビキニ。紬先輩は黄色の水着。梓はピンクのワンピース。小雪は……スク水

雪那「ちよつと待つてええええええー」

小雪「どうしたの？雪兄」

雪那「何で、スク水なんだよ。てか、名札が「6年1組」って、小
学校のかよ」

小雪「だって、これぐらいしか無かったんだもん。あとで、水着買
つてよ」

雪那「やだ。」

小雪「ケチ。所で、梓姉の水着かわいいよね」

小雪は梓の方を見て、言った。確かに可愛いけど、

梓「どうしたの？何かじっと見てるけど、」

雪那「いや、梓の水着かわいいなって」

梓「えっ、あ、ありがとう。」

小雪「作戦完了。」

律「やっぱり、あの二人をくつつける為に付いて来たのか？」

小雪「部長さん。そうですよ。私的には梓姉とくつついて欲しいで
すから」

律「だったら、私も協力するぞ」

小雪「ありがとうございます。とりあえず、邪魔な義兄を…っつて、義兄は」

小雪が辺りを見渡すと、鼻血を出して倒れる義亮がいた。

律「水着の免疫無かったのか？」

第11話 動き出す心 その2（後書き）

六甲水「まあ、確かに水着回は素晴らしいですね」

義亮「というか、何で小雪はスク水」

六甲水「需要があると思いますが、可愛いじゃんスク水」

義亮「まあ、かわいいけど、」

六甲水「次で合宿が終わり、クライマックスへ」

第12話 動き出す心 その3（前書き）

六甲水「果たして、雪那と梓の仲は発展するのか」

霧夜「まあ、するんじゃないのか？互いに意識してるし、」

六甲水「まあ、するけどね。だけど……」

霧夜「けどなんだよ。」

六甲水「さあ？それは見てからのお楽しみ」

第12話 動き出す心 その3

第12話 動き出す心 その3

夜、練習も終わり、夕食も食べ終わった時、律先輩からある提案が

……

律「肝試しをしよう」

唯「おお〜」

小雪「おお〜」

唯先輩とこゆは一緒に肝試しに賛成する。澁先輩は少し怯えている。ムギ先輩と義亮は内心楽しそうにしている。そして、俺達は……

雪那「こんな暗い中、迷ったら遭難だよな」

梓「怖くないの？」

雪那「ああ、結構楽しそうだし、」

梓「そうなんだ。」

二人で話していると、こゆが近づいてきて、懐中電灯を持たせてきた。

小雪「最初は雪兄と梓姉だよ。」

雪那「俺らが一番だよ。」

小雪「うん、その海岸沿いを歩いて、森の中に入って、ここまで戻ってきて、」

雪那「分かった。梓行こう」

梓「う、うん。」

懐中電灯を持ち、梓と一緒に別荘を出た。

律「さてと、じゃあ、残りのはあそこの森の中から入って、」

漣「ん、梓達と別のルートなのか？」

義亮「律先輩、もしかして、ふたりっきりにさせる気ですか」

律「正解だ。りょう。あの二人をいい雰囲気させなきゃな」

漣「なるほどな、」

紬「二人ともお似合いだからね」

唯「どういう事？」

小雪「唯姉はまだ理解してないね。」

海岸にたどり着くと、月に照らされた海と星空が広がっていた。

梓「綺麗。」

雪那「そうだな。こんな場所で肝試しなんて、絶対合わないだろう」

梓「そうだね。」

まさか、わざと二人つきりにさせるためか。ハメられたか。

雪那「そういえば、焼けてるな。」

梓「うう、日焼けしやすい体質なのかな？」

雪那「まあ、日焼けしてる梓も可愛いけどな」

梓「えっ、」

ん、おい、今は俺、何て言った。うわー、意識せずに思いっきり恥ずかしいこと口走た。梓も何か顔真っ赤だし、何とか話変えなきゃ、

雪那「そ、そういえば、お前誕生日11月だっけ」

梓「えっ、う、うん。そうだよ。ちょ、丁度学祭と被るんだよね」

雪那「あ、あのさ、だったら、その時に、渡したいものが……」

梓「何？」

雪那「それは、まだ秘密。」

梓「分かった。じゃあ、」

そう言つて、梓は俺の頬に軽くキスをしてきた。突然のことだったので、何があつたか分からなかつた。

梓「私、ゆきの事好きだよ。答えは学祭の時に聞くから」

こうして、合宿は終わった。だが、まさかあんなことになるなんて

……

梓 side

学祭二週間前、私は一人で家に帰る途中だった。ここ最近起こつたことは、唯先輩のギターのメンテナンスに行つたり、律先輩と澁先輩が喧嘩したりと色々と合つた。だけど、一番心配なのは、合宿終わつてから、ゆきと会っていないことだった。澁先輩からはしばらく部活を休むという連絡しかなかつたらしい。

梓「ゆき、どうしたのかな？そうだ、何かお土産買って、ゆきの家に行こうかな」

そう思い、商店街の通りに入るとそこには、

梓「えっ、」

ある店から出てくるゆきと見知らぬ少女が腕を組んで歩いている姿だった。その姿を見たとき、私の中から何かがヒビ割れる音が聞こえた。

第12話 動き出す心 その3（後書き）

六甲水「……………」

義亮「……………」

雪那「おい、待て、なんだよその目は」

六甲水「梓にほっぺにキスされた癖に、浮気か」

義亮「最低だな」

六甲水「とりあえず、社会的に抹殺されると、英樹の所に送るどころがいい？」

雪那「ご、誤解だ。」

六甲水「お前に発言の権限はない」

義亮「とりあえず、死んで詫びるんだな」

霧夜「というか、これ書いたの作者だよな」

郁斗「ああ、というか、雪那に浮気する度胸がないしな」

心「これからどうなるんだろうね」

第13話 ひび割れる関係(前書き)

郁斗「梓と雪那の関係はどうなるんだ？」

心「今回は12話の最後からです。」

第13話 ひび割れる関係

第13話 ひび割れる関係

梓「ゆ……………き」

雪那「えっ、梓。」

後ろを振り向くと、そこにはうつむいてる梓がいた。

雪那「こ、こんな所で何してるだ？」

梓「……………」

梓は何も言わず、走り去っていった。俺は隣にいる少女に荷物を預け、梓を追いかけた。

雪那「待てよ。梓」

逃げる梓の腕を掴み、梓と向き合った。だが、梓はずっと俯いているままだった。

雪那「何で、逃げるんだよ。」

梓はうつむいたまま、話した。

梓「今の女の子誰？」

雪那「えっ、あ、あれは、」

梓「そうなんだ。言えないんだ。そうだよ。ゆきにとって大切な人だよ」

雪那「お前、何かかん……」

突然、梓は俺の手を振りほどき、涙を流しながら、言った。

梓「私の気持ち知ってて、騙すなんてひどいよ。もう、顔も見たくない。声も聞きたくない。さよなら」

そう言い残し、梓はそのまま走り去っていった。

霧夜 side

休み明け、教室に入るとある違和感を覚えた。それは、いつも仲良く話している中野と雪那が今日に限って、何故かお互い離れている。朝はただ単に離れているだけなのかと思っただが、一日様子を見ていて、二人は話をしないどころか、一回も顔をあわせていない。気になったので、とりあえず、雪那に話を聞いてみることにした。

霧夜「なあ、雪那。なんか合ったの？」

雪那「……別に」

雪那は機嫌悪そうに返してきた。

霧夜「お前、中野と何か……」

雪那「悪い、キリ。しばらく一人にしてくれ」

話を切り上げ、雪那はカバンを持って、どこかへ消えていった。

それから数日が立った。未だに雪那は中野の顔を見るのがなかった。とりあえず、部活での様子を聞いてみるため、義亮に話しかけた。

霧夜「なあ、雪那と中野。部活ではどうなんだ？」

義亮「ん、雪那ならばらく部活にでてないぞ」

霧夜「まじかよ。じゃあ、中野の様子は？」

義亮「梓か。何かずっと暗い顔してるぞ。唯先輩とかが話しかけても、無反応だし、今度、唯先輩の家で梓のこと話すらしいから、お前も参加するか？とりあえず、唯先輩は小雪ちゃんにも連絡するって言ってたけど」

霧夜「ああ、」

そして、その日になった。家には軽音部メンバー（梓と雪那を抜いた）と小雪と俺と憂が集まった。

律「とりあえず、憂ちゃん。あの二人に何かあったか知らないか？」

憂「梓ちゃんから話聞いたんですけど、ちょっと前に雪那くんが知らない女の子と一緒にいるところ見ちゃったんだって、多分それかな」

透「それ、本当か？でも、雪那は梓の事好きなんじゃ……」

律「とりあえず、一緒にいた女の子を見つけて……」

その時だった。小雪が自信なさそうに手を上げた。

律「どうした？小雪。」

小雪「あの、私。その女の子知ってます」

義亮「まじかよ。誰だよそれ」

小雪「わ、私なんです。」

第13話 ひび割れる関係（後書き）

六甲水「衝撃の事実。まさか雪那と小雪が禁断の愛に」

霧夜「違うから」

第14話 雪那（前書き）

六甲水「今回は、雪那が部活を休んでいた理由が明かされます」

霧夜「というか、もうクライマックスだな」

六甲水「まあ、憂と霧夜の話もやらなきゃいけないし、心と郁斗の話もやらないといけないからね」

霧夜「それじゃあ、第14話スタート」

第14話 雪那

第14話 雪那

小雪の口から出たの衝撃の事実だった。それは、

紬「一緒にいた女の子が、小雪ちゃんなの？」

小雪「うん、そうだよ。」

透「でも、憂ちゃんの話では、梓が見たのは知らない女の子だよな。梓は小雪のこと知ってるはずだけど、」

小雪「えっと、話せば長くなるんだ。」

義亮「いいから、話してくれ」

小雪「うん、まずは……」

過去

合宿が終わってから数日後の事だった。雪兄が私の部屋に入ってきて、相談をしてきた。

雪那「なあ、女の子って何をもらったら嬉しいかな？」

小雪「何？梓姉に何かプレゼント」

こんな相談をしてくる時点で、ある程度の予想はついた。合宿できっと二人の関係が発展したんだ。

雪那「まあ、そうだけど、ちょっと、誕生日にプレゼントしたいんだけど、梓には何かあげると言ったんだけど、まだ何をプレゼントするか決めてないんだ」

小雪「ふーん、雪兄は梓姉告白したの？」

雪那「あ、梓から告白されたんだけど、返事は誕生日の時にしようと思ってるんだ」

返事は誕生日にか。まあ、いいと思うな。二人が結ばれるの嬉しいし、

小雪「普通なら、婚約指輪とかだけど。」

雪那「そうだけど、指輪はそんなに高いもの買えないし、」

小雪「お母さんたちの所で働いたら？雪兄はそんなにお金使ってないからすぐにも買えるよ」

雪那「そうするか。ありがとうな。こゆ」

そう言っつて、雪兄は私の部屋を出ようとした。だけど、私はある事を思いついた。

小雪「待って、プレゼント一つだけじゃなくって二つにしない？」

雪那「二つって？」

小雪「それはまだ秘密だけど、雪兄は指輪を買ったために頑張ってるから」

雪那「わ、分かった。」

現代

小雪「それから雪兄は部活休んでバイトしてるんだよ」

透「だから、部活を休みたいって言ってたのか」

唯「それで、指輪は買えたの？」

小雪「うん、あれは丁度一週間前かな」

過去

小雪「お金集まったの？」

雪那「ああ、今から買いに行く。」

小雪「私も行くからちょっと待ってて、」

そう言い残して、私はある準備をしていたの。それは……

雪那「……何だ？その髪と化粧は？」

私は、普段黒い髪とは違う白い髪のカツラを被り、少しだけ化粧をした。

小雪「演劇部の友達からもらったんだ。試してみたくって、ついでに化粧してみたんだ」

雪那「元の面影がないからな」

小雪「今度、梓姉を驚かしてみよう」

雪那「多分、分からないだろうな」

現代

小雪「それで、雪兄と一緒に指輪を買いに行ったんだけど、つい悪ふざけすぎて、腕組んだりしちゃって、そこを梓姉に見られちゃったんだ」

澪「そんな事が、」

義亮「だけど、何であいつは部活に顔出さないんだ？」

律「きつと、出しづらいんだよ。あんなこと合ったからな」

紬「それでも、二人が仲が悪いのは嫌」

唯「うん、どうにかしてあげたいよ」

小雪「とりあえず、私は学祭の時に梓姉にこのこと言います。元は私が悪いんですから」

霧夜「所で、もう一個のプレゼントって?」

小雪「ああ、それは……………」

川原

川原にある二人の姿があった。一つは雪那。もう一つはメガネを掛けた男だった

雪那「はあ、あと一週間か」

光真「たく、部活に顔出さずに俺のところに来やがって、さっさと謝ればいいんだよ」

雪那「それが出来ればいいんだけどな。学祭の時に謝るよ。」

光真「そういえば、もうひとつのプレゼントはどっしたんだ?」

雪那「もう少しで完成だって、綺月が言ってた」

光真「ちゃんとやれよ」

学祭まで残り一週間

第14話 雪那（後書き）

六甲水「もうひとつのプレゼントとは、」

光真「やっと俺の登場か」

心「ずいぶん遅い登場だったね」

郁斗「作者のことだ。どこで出すか迷ってたんだろ」

六甲水「まあね、次は心と郁斗と光真のキャラ設定で、その次は最終回です」

キャラ設定その4（前書き）

六甲水「最後のキャラ設定です」

心「ところで、わたしたちのキャラ設定は、わたしたちのメインの小説でやるって言ってなかったっけ？」

六甲水「気が変わりました。」

郁斗「あっそ」

キャラ設定その4

キャラ設定その4

綺月心はなづきこころ1

女子の制服などを着ているがれっきとした男性。何で女子の制服を着ている理由は、家の事情で着るはめに、（そこら辺はメインの小説で）郁斗と仲が良い。小雪とは中学校の先輩という関係で、小雪と同じく雪那と梓の恋を応援している。（雪那と義亮と同じ中学校だが、別クラスだったので、あんまり話してなかった）比較的女子とも仲が良い。運動神経はいいが、勉強は全然ダメ。

葉渡郁斗はわたりいくと1

雪那と義亮と心と同じ中学。中学の頃、女のだと思って心に告白して、心が男だと知って、落ち込んでいたが、それ以来、仲が良い。文武両道。性格は世話好き。心の世話係。普段は自転車で学校で通っている。心と同じく雪那と梓の恋を応援している。

久流光真くろみつひま1

雪那達男子グループのまとめ役。普段からメガネを掛けており、勉強が出来るが、雪那や郁斗の性でいつもテストでは負けている。雪那の両親が経営する楽器店でバイトしているため、雪那と仲が良い。よく雪那の相談にのる。運動は並程度しかできない。

キャラ設定その4（後書き）

六甲水「以上が、キャラ紹介でした。次回は最終回です。果たして雪那と梓の仲は戻るのか」

光真「番外編とかやらないのか？」

六甲水「やります。」

心「やるんだ」

最終話 雪那と梓（前書き）

六甲水「梓編の最終回です。果たして、雪那と梓はどうなるのか」

最終話 雪那と梓

最終話 雪那と梓

霧夜 side

あれからまた一週間が過ぎ、学園祭当日、未だに雪那と中野の仲は戻らない。さらには、雪那は学校を休み続けている。俺は憂とともに、音楽室に向かっている。

霧夜「雪那の奴。さすがに今日は来るよな」

憂「うん、もう一週間も休んでるんだよ。このまま来なかったら……」

霧夜「小雪ちゃんに聞いたけど、ずっと部屋にいるって」

憂「私、二人が仲悪いのを見ているのは嫌だよ。折角楽しい学園生活が、無くなってきたのは嫌だよ。」

憂の眼からだんだんと涙が零れてきている。俺はそつと憂の頭を撫でた。

霧夜「大丈夫だ。きっとあいつは来る」

そして、音楽室に辿りつき、扉を開けると唯姉さんたちは練習中だった。だが、中野の様子が少しおかしかった。あんまり演奏に集中できていないようだった。

律「梓、大丈夫か？」

梓「え、あ、はい」

唯「あれ？ やっくん。それに憂」

唯姉さんが俺達の事に気がついた。

霧夜「義亮、雪那から連絡は？」

義亮「全然きてない。」

澪「梓もこの調子だし、どうなるんだ。」

紬「ずっと、こんな空気にいるのは嫌。何とかしてあげたい」

すると扉が開く音がした。全員が扉の方を見ると、入ってきたのは

小雪だった。

小雪「おじゃまします」

律「何だよ。小雪ちゃんか」

梓「どうしたの？」

小雪「実は梓姉に話したいことが……」

梓「えっ、」

小雪は真相を話した。

小雪の話聞いて、中野はただショックを受けていた。そして、中野の眼から涙が零れてきた。

梓「わ、私、ゆきに、ひつく、ひ、ひどいこといっちゃた。もう、顔を見たくないって、声も聞きたくないって、わ、私……」

ただ後悔をする中野を唯姉さんがそっと、抱きしめた。

唯「大丈夫だよ。せつちゃんは気にして無いよ。せつちゃん、あずにゃんのこと大好きだもん」

梓「唯先輩……うあああああああああ」

中野はただただ、泣いていた。そして、ずっと、雪那の名前を呼んでいた。

そして……ライブの時間がやってきた。

俺と憂と純と小雪は後ろのほうで演奏を聞いていた。演奏は、音楽にあんまり詳しくない俺でも素晴らしいものだと思っただが、やっぱり、中野は演奏に集中できていなかった。

霧夜（雪那。お前、今どこにいるんだよ。早く会いに行つてやれよ）

一曲目の演奏が終わりそうになったその時、講堂の扉が勢い良く開けられ、そこにいたのは……息を切らしている雪那だった。

30分前

雪那side

心「ごめん、雪くん。例のもの持ってくるの忘れちゃった」

校門前で、俺は綺月に頼んでいた物を忘れたということ聞いたのだった。

雪那「おいおい、どうするんだよ。アレがないと……お前の家にあるのか？」

心「ううん、郁くんの家で最終調整してたから、郁くんの人に、」

雪那「取りに行くしか無いよな。アイツの家は知ってるし、走って……」

郁斗「どうせ取りに行くんだったら、俺の自転車使え。ここからどんなに走っても三十分はかかる。自転車なら急いでいけば十五分で行けるはずだ」

雪那「ありがとうな。あとで埋め合わせする」

郁斗「埋め合わせするんだったら、迷惑掛けた奴らにしとけ」

雪那「ああ、」

俺は葉渡から自転車の鍵を受け取り、葉渡の家を目指した。自転車を急いでこぎながら、葉渡の家に辿りつき、あるものをしっかり持ち、学校に戻った。そして、学校の校門まで辿りつき、そのまま自

転車を乗り捨て、俺は講堂まで走った。すでにけいおん部の演奏は始まっている。俺は全力疾走をして、講堂の扉を勢い良く開けた。扉の近くにはキリと憂と純とこゆがいた。

霧夜「遅いぞ。雪那。」

雪那「悪い、忘れ物を取りに行ってきた。」

梓たちも俺の姿に気が付き、梓以外はほっとした顔をして、梓はただ泣いている。俺は走って、舞台上上がった。そして、

雪那「はあ、はあ、遅くなった。」

漣「遅いぞ。」

律「ずっと待ってたんだからな」

俺は梓に近寄ったが梓は俯いていた。

梓「ごめ、ごめんなさい。私、勘違いして、ゆきにひどいこと言っちゃった。」

雪那「俺は気にして無い。」

梓「で、でも、」

梓は泣きながら弁解をしていた。俺はそつと頭を撫でた。

雪那「気にしてないって言ってるだろ。俺こそ本当のこと言えなくってごめんな」

梓「ゆき」

雪那「梓、ちょっと左手だしてくれないか？」

梓「えっ、う、うん」

梓は言われるままに、左手を出した。俺はポケットから銀色の指輪を取り出し、そっと、薬指にはめた。

梓「こ、これ、」

雪那「誕生日プレゼントだよ。結婚指輪とかがよかつたんだけど、今はペアの指輪で我慢してくれ」

そうやって、俺は左手の薬指にはめた指輪を見せた。梓はまた泣き出した。

雪那「たく、泣きすぎだ。眼が真っ赤だぞ」

梓「だって、」

雪那「あと、もう一個あるんだ。」

梓「えっ、」

俺はもう一個のプレゼントを取り出した。それは真っ白で綺麗な布ウエディングドレスで花嫁が付ける白いヴェールだった。俺は梓にヴェールを付けた。

梓「こ、これって、」

雪那「本当は、こゆが知り合いに頼んでただけど、無くって、俺も買おうと思ったら、金が足りなくて、綺月あたりに話したら、作り方を教えてもらったんだ。ちよつと歪だけど、駄目か？」

梓「ううん、嬉しい。」

雪那「そっか、それじゃあ、」

俺は梓の唇に軽くキスをした。その瞬間、講堂にいた全員が驚いていた。

霧夜「あいつ、こんな所で」

憂「わあー、」

純「これって、いわゆる結婚式みたいなものかな？」

こゆ「おめでとう。雪兄、梓姉」

梓「えっ、えっ、」

梓は突然のことだったから何があったか理解できてなかった。

雪那「梓、合宿の時の答えいいか。」

梓「う、うん」

雪那「俺は梓のこと大好きだ。どんな誰よりも一番好きだ。俺と一

緒にいてくれないか？」

俺は堂々と宣言した。そして、梓は顔を真赤にして、縦に首を振った。

雪那「律先輩」

律「何だ？」

雪那「ちよっと、梓借りますね」

律「ああ、借りてっていいぞ。あとで、みんなにご馳走な」

雪那「分かってますって、ほら、梓行こう。」

梓「え、ちよ、ちよっと」

俺は梓をお姫様抱っこして、そのまま講堂を走り抜けた。

音楽室

俺と梓は音楽室に入った。

梓「もう、ライブ中に抜け出すなんて、」

雪那「ライブ中に抜け出すなんてまだいいよ。俺なんかお客さんがいる中告白はするは。キスはするはで、すんごい恥ずかしくなってきたるんだぞ」

梓「これ、絶対にしばらく注目の的だよ。」

雪那「いいんじゃないのか？人の目を気にせずにいちゃつけるぞ」

梓「恥ずかしいから。ねえ、ゆき」

雪那「何だ？」

梓「一緒にいてくれて、それって、その、将来的なこと……」

雪那「……出来ればそうしたいけど、駄目か？」

梓「ううん、いいよ。ゆきと一緒に入れるから」

雪那「そうか、しあわせになろうな」

梓「うん」

もう一度、キスをした。いろいろなことがあったが、俺はこの子をずっと大切にしていきたいと思う。大好きだ梓

おしまい

最終話 雪那と梓（後書き）

六甲水「梓編終了です。いやー、まさか、全校生徒？がいるまえでの告白するは、キスするは、やるじゃん、雪那」

雪那「十分恥ずかしかったけどな」

梓「う、うん。」

小雪「二人が付き合ってくれて私は嬉しいよ。雪兄、梓姉。あつ、これからは梓お義姉ちゃんって言ったほうがいいかな？」

梓「えっ、それはちょっと、」

霧夜「所で、今回で最終回だけど、次は別の方の俺と憂の奴か？」

六甲水「一応、そうだけど、まだ番外編やりますよ。二人のその後のな感じで、」

心「わたしたちの話は？」

六甲水「とりあえず、霧憂編と心郁編をやったら、次に、澪編、唯編、唯たちが三年生になってからの梓編をやりますよ。期待してください」

番外編 冬の日（前書き）

六甲水「今回は番外編をお送りします」

律「所で、わたしたちの出番少くないか？」

漣「うん、そうだ。」

紬「まだ唯ちゃんたちの方が出番が多いわ」

六甲水「大丈夫。別の場所では出番上げますよ」

番外編 冬の日

番外編 冬の日

俺が梓に告白した学園祭から三週間が過ぎた。最初の頃は唯先輩たちからかわれたが、今はそんな事はない。そして普段どりの日常を歩むことになったある日、梓が道の真中で座り込んでいた

雪那「あいつ、なにしてるんだ？」

不思議に思い、俺は梓の後ろから見ると梓はそっと、猫に触れようとしていたが、猫が急に鳴いてきたので、梓は驚いて尻餅を付いた。見かねた俺は声を掛けた。

雪那「お前、なにしてるんだ？」

梓「ひゃ、ゆき。おはよう」

雪那「おはよう。それで、何で猫なんか触ろうとしてたんだ？」

梓「え、えっと、実は……」

雪那「ふーん、純の猫を預かるねえ」

梓「うん、でも私、猫の扱いになれてないから」

雪那「猫っばいのか？」

梓「うっ、それは関係ないよ。所でゆきは寒くないの?」

梓の言うとおり、俺の格好は普通の制服を着ていて、マフラーもコートも身につけていなかった。

雪那「別に寒くないぜ。逆に夏に弱いけど、」

梓「名前通りだね。でも、手が真赤だよ。」

雪那「あんまり気にしてないけど」

梓「そう?あのさ、折角だから、手をつないで行かない?」

梓は顔を真赤にしながら言った。まだ付き合い始めてキスはしたが手をつないだりはしていない。

雪那「そうだな。暖かくなるからな」

二人で手をつないで、学校に向かった。

放課後、今日は日直で部活に出るのが遅くなった。音楽室に入ってみると唯先輩と義亮と梓以外の全員が何だか様子がおかしかった。

雪那「遅くなりましたって、いつも通りのお茶会ですか?」

律「ん、まあな。」

漣「今日は日直か?」

雪那「はい、」

唯「寒くて演奏できないよ。」

雪那「唯先輩、寒いからって、手袋つけて演奏したりしないでくださいよ。余計やりにくいですから」

俺が忠告すると同時に唯先輩は手袋をつけてギターをしようとしていた。

唯「あはは、何で私がやろうとしたこと分かったの？超能力？」

雪那「唯先輩の行動なんか読めますよ。」

こうして、今日の部活は終わった。部活の最後、唯先輩が鍋をやるうと誘われたが、みんな用事があったって行けなかった。

そして、次の日。俺と小雪は近くのスーパーで買い物をしていた。

小雪「今日は何にするの？」

雪那「寒いから何か暖かくなるものに」

小雪「鍋とか？」

雪那「鍋か。折角だから今からでも唯先輩の家にお呼ばれでも……」

唯「あれ？せつちゃんだ。」

憂「こんにちわ。」

霧夜「よお、雪那」

唯先輩と憂とキリが一緒になって買物をしていた。

小雪「こんにちは。唯姉、憂姉、霧兄。みんなで買い物ですか？」

唯「うん、あつ、そつだ。マシユマロ豆乳鍋といちご牛乳鍋どれがいい？」

唯先輩の口からとんでもない鍋の名前が出てきた。キリはただ額に手をおいていた。

雪那「何ですか？闇鍋ですか？」

唯「えー、違うよ。新しく鍋を開発しようと思ったんだよ」

小雪「ふつうのお鍋にしたほうがいいよ。」

唯「むう、それじゃあ皆に相談してみよう」

そう言つて、唯先輩は全員にメールを送った。

雪那「そういえば、梓の奴は家にいるんじゃないんですか？」

霧夜「ふーん、お前ら本当に仲がいいんだな」

雪那「お前らもな。」

俺はキリと憂を両方見た。二人とも顔を真赤にしている。

小雪「ラブラブだね」

唯「あれ、返信が来ない。あつ、あずにゃんから電話だ。もしもし、」

梓「こんな時に変なメール送らないでください。」

唯「こんな時って？」

梓「猫です。友達から預かった猫が……」

唯「ちよっと、待ってて、今から行くから」

小雪「梓お義姉ちゃんが何だって、」

唯「猫が大変なことにだって、急いで……って、せつちゃんは？」

梓「うう、あずにゃん二号。大丈夫。どうしよう」

その時、突然玄関の扉が開く音がして、私の部屋にゆきが入ってきた。

雪那「大丈夫か？梓」

梓「ゆ、ゆき。どうして」

雪那「唯先輩から梓が大変なことになって聞いて、急いできたんだけど、」

梓「そうだ、猫が……」

雪那「猫。猫に何がって、これって、」

その後、唯先輩達が来て猫の様子を見に来たのだ。結局猫は毛玉を吐いてるだけだった。

梓「すみません。猫が毛玉吐くってこと知らなくて」

小雪「お兄ちゃんたら、気づいたらいなくなってるんだもん。愛さ
れてるね」

梓「そ、そんな事は……」

霧夜「お似合いだな。」

憂「そうだね。」

その後、唯先輩からムギ先輩がバイトしていると聞き、俺と梓以外
はムギ先輩のバイト先に向かった。

梓「ゆきも行けばよかったのに」

雪那「お前にまたなんかあると困るからな」

梓「ん、もっ、」

梓は自然と目をつぶった。俺は軽くキスをした。

雪那「たく、積極的になつたな」

梓「えへへ、」

番外編 冬の日（後書き）

六甲水「一回目の番外編終了です。次はオリジナルの番外編です。」

雪那「何のはなしをやるんだ」

梓「じゃあ、」

番外編 二人っきりの空間（前書き）

六甲水「今回の番外編は雪那と梓と霧夜と憂が出ます。」

雪那「あきらかにタイトルと別な話の気が……」

六甲水「大丈夫。ちゃんと二人っきりの空間を作りますよ」

番外編 二人っきりの空間

番外編 二人っきりの空間

今日は俺と霧夜と憂とで梓の家に来てきた。玄関の呼び鈴を鳴らし、しばらくしてから梓が出てきた。

梓「いらっしやい。上がって上がって」

雪那&憂&霧夜「お邪魔します」

霧夜「それにしても、俺達もお呼ばれしてよかったのか？」

梓「何で？」

霧夜「いや、二人っきりの方がいいと思って」

雪那「別に俺達は気にして無いから。」

憂「所で、そろそろ始めない？」

梓「そうだった。」

今日、梓の家に来た理由は、遊ぶのではなく、勉強会を開くためだ。本当は義亮たちも来る予定だったが、用事があって来れなくなった。

雪那「で、教えるのは俺一人か？」

憂「ごめんね。今回のテストは自信がなくなつて」

梓「珍しいね。憂が自信ないなんて、」

霧夜「どこかの誰かが喧嘩してて、勉強そっちのけだったからな」

雪那&梓「ごめんなさい」

霧夜「いい加減始めるか」

俺が三人に勉強を教えることになった。それから二時間後、

雪那「何で、憂以外が寝てるんだよ」

憂「二人とも疲れてるから。雪那くんは眠くないの？」

雪那「俺はずっと教えてる側だったからな。特に眠くはない。」

憂「そうだね。あつ、私ちよつとおトイレ行ってくるね」

雪那「場所分かるのか？」

憂「うん」

そう言つて、憂は部屋を出て行った。ふっと、俺は梓の寝顔を見ていた。

雪那「それにしても、ぐっすり寝やがって」

あの学祭以来、梓という時間が多くなつた気がする。関係がギクシ

ヤクしてしまったことがあったが、今はない。たまに喧嘩をするが、すぐに仲直りをしている。

雪那「何かこうぐっすり寝ているとむかついてきた。この前唯先輩にもらったこれを…」

俺はカバンからネコミミカチューシャを梓の頭につけた。

雪那「やっぱり似合うな。それにしても、綺麗な髪してるな」

俺は梓の髪をそっと触った。結構やわらかかった。

雪那「綺麗な髪だし、なんか柔らかいし、うう、キスしたくなってきた。」

俺は梓が起きないようにキスをしようとするが、何故か寝ているはずの梓の体がビクっとなった。

雪那「梓、お前起きてるだろう」

梓「……………」

雪那「黙ったままか。なら、」

俺は寝ている梓にキスをした。みるみるうちに梓の顔は真っ赤になった。

梓「……………もう、」

雪那「つい、」

梓「もう一回して」

梓に言われるまま、俺はもう一度、梓にキスをした。

霧夜（お、起きるに起きれない）

憂（入るに入れない）

番外編 二人っきりの空間（後書き）

六甲水「終始ラブラブだね」

雪那「うるさい。」

梓「うるさいよ」

六甲水「今回で梓編は一旦終わりです。」

霧夜「今度は俺達の方に集中か？」

憂「どんな話になるんだろうね」

六甲水「やるとしたら、前も言ったように霧憂編 心郁編 唯編

澪編 新梓編 新霧憂編の順でやりますから」

小雪「私も出番があるの？」

律「というか、私等も出番くれ」

六甲水「ちゃんと全員が出番があるように書きますから。それじゃあ、梓編は終了。次の霧憂編をお楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230n/>

けいおん IFストーリー

2011年5月23日21時04分発行